

図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2019.
April
No.186



新入生にイチ押しの1冊

1 フェイクニュースからメディアの歴史へ
図書館長 北垣 徹

2 ブックレビュー

『こんな夜更けにバナナかよ』『社会をちょっと変えてみた』
人間科学部 社会福祉学科 准教授 山田 美保
『生き方: 人間として一番大切なこと』
図書情報課 川崎 陽奈
『The Missing Piece』
文学研究科 英文学専攻 博士前期課程 2年 前原 彩良
『ザ・プレゼンテーション: 人を動かすストーリーテリングの技法』
法学部 国際関係法学科 4年 芹澤 優紀

3-4 世界の図書館

タントウ・エキュメニカル研究所図書館
神学部 神学科 教授 濱野 道雄

LSE図書館

法学部 国際関係法学科 教授 山本 健

5-6 データベース紹介

ディスカバリーことはじめ: プレグジットとメイ英首相と
図書情報課 坂本 里栄

7 蔵書ギャラリー no.26

『Book-keeping Moderniz'd: or,
Merchant-accounts by double entry,
according to the Italian form...』

商学部 商学科
教授 工藤 栄一郎

新入生の皆さんも、「フェイクニュース」という言葉を耳にしたことがあるでしょう。嘘のニュース、虚偽報道のことです。2016年のアメリカ大統領選では、フェイスブックやツイッターを通じて、「ローマ法王がトランプ支持を表明した」「民主党候補ヒラリー・クリントンは、テロ組織に武器を売却した」などのニュースが拡散しました。これらは後に、事実でないことが分かりますが、選挙の結果に影響を及ぼしたのではないかと疑われています。またその出所は、アメリカ国内ではなく外国だということも推察されています。背景には、特定の候補者を勝たせるための政治的な意図に加え、アクセス数を増やして広告収入を得るなど、経済的な動機もあったようです。

2017年のフランス大統領選挙でも、エマニュエル・マクロンを中傷するフェイクニュースが、やはりソーシャルメディアを通じて流れたようです。それでも彼は大統領に選ばれましたが、昨年暮れにフランスでは「情報操作防止法」が公布されました。この法律は、選挙への影響を防止するという名目で、司法がフェイクニュースの拡散を止めさせる急速審理を行うことを認めています。またソーシャルメディアの基盤である「プラットフォーム」には、コンテンツのスポンサーについて開示する義務を課しています。法律の狙いは、フェイクニュースや外国メディアによる選挙への影響を防ぐことのように思いますが、他方でこれにより、ソーシャルメディアを通じた民主的な言論活動が制限されるのではないかと懸念も出ています。

またアメリカでは、大統領に選ばれたドナルド・トランプは、自分にとって都合の悪い新聞やテレビの報道を「フェイクニュース」だと言いつづけています。ニュースを流すメディア自体が、そのニュースをフェイクだと言うことはありません。「フェイクニュース」という言葉は主に、誰かが誰かを非難するときに使われます。2016年大統領選時に、ソーシャルメディアで流されたニュースにたいして「フェイクニュース」だと断じたのは、新聞やテレビなど、旧来のマスメディアでした。トランプは逆に、こうしたマスメディアにたいして「フェイクニュース」だという非難を、ツイッターという新たなメディアを通じて行っています。日本でも、同じような用法がみられます。新聞やテレビのニュースをネット上で誤報だと非難する際にも、やはり同じ言葉が用いられています。もしかしたら今の日本では、後者の用法の方が広まっているのかもしれませんが、いずれにせよ「フェイクニュース」は、ある特定のメディアから別のメディアにたいして、非難の言葉として投げかけられています。この話が飛び交う現象の背後には、新旧のメディアの対立・交替・再編の動きがあります。

1950年代にテレビが登場したとき、ジャーナリストの大宅壮一は「一億総白痴化」という言葉で、この新たなメディアを卑俗だと批判しました。こうしたテレビ批判は当時、主に新聞や週刊誌を通じてなされています。他方で、新聞というメディアも初めて登場したときには、やはり別のメディアから批判されました。例えば18世紀のフランスで、啓蒙思想家デイドロは、週刊の新聞について次のように述べています。「無知な者の糧であり、読書せずに語ったり判断しようとする者の源であり、まじめに仕事する者にとっては災

厄で嫌悪すべきものだ」*1。この批判は、デイドロがダランベールと共に編集した『百科全書』の一項目に現れるものです。このフランス啓蒙思想の集大成一本編・補遺・図版・索引合わせて35巻一については、皆さんも高校の世界史で少し習ったのではないのでしょうか。このような百科事典、つまり、あらゆる事物や現象、事項をアルファベット順・五十音順に配列し、数十巻で構成され、本棚を大きく占めるメディアは、かつては日本の家庭の



百科全書

中でも鎮座していたのですが、今日ではほとんど見られなくなってしまいました(代わりに、何か調べるときにはネットで「ググる」ようになってしまいました)。それはさておき、デイドロは大革命前のフランスで、壮大かつ实际的な知の体系たる『百科全書』というメディアを構築しつつ、新聞を軽薄でその場かぎりのメディアとして批判したのです。

さらに歴史を溯り、今からおよそ500年前、ヨーロッパで印刷術が発達し、それまでの写本に替わって、印刷された多くの書物が出回るようになったときは、どうだったのでしょうか。印刷術の発明が、いかに人間の知覚や精神を変容させたかは、マーシャル・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系—活字人間の形成』(1962)が鮮やかに示しています*2。今年の1月から3月にかけて、大学博物館で開催された企画展「宗教改革と印刷革命」では、写本の聖書と印刷された聖書を並べて見ることができました。15世紀半ばに登場する印刷術と、16世紀初頭に始まる宗教改革との強い結びつきは、よく知られています—教会が建設資金や戦費調達のために発行した贖宥状(免罪符)も、それを激しく攻撃したマルティン・ルターの「九十五カ条の論題」も、そして彼がドイツ語に訳した新旧約聖書も、すべて当時の先端テクノロジーによって「印刷された」ものだったのです。



グーテンベルクの銀河系

この企画展でも展示され、また題名の元にもなった「印刷革命」(1983)において、エリザベス・アイゼンシュタインは、印刷された各国語訳の聖書が、宗教改革の舞台を用意した点だけでなく、印刷物が近代初期のヨーロッパにおいて、学問や科学にとって大きな役割を果たした点を強調しています*3。活字だけでなく、挿絵や図表が印刷され、同一のものが早く大量に人びとの間に普及する事態は、まさに彼女のいう「コミュニケーション革命」でした。

さらに近年の研究成果を踏まえて、アンドルー・ベティグリー『印刷という革命—ルネサンスの本と日常生活』(2010)は、黎明期の印刷文化のより錯綜した姿を描き出しています*4。ベティグリーによれば、当時出版された本は、宗教や学問にかかわるものだけでなく、娯楽や実用にかかわるものも含めて、多岐のジャンルにわたるものでした。時事的なニュースを扱う小冊子も多く印刷され、それが政治的プロパガンダの手段にも使われていたようです。そのため、印刷物というこの新たなメディアは、人びとを墮落させ道徳を崩壊させるものとして、当時の文化エリートからは激しく批判されていました。その結果、印刷物へのアクセスをいかに規制するかが社会問題になります。他方で、印刷業者を支える融資とマーケティングの複雑なシステムも形成されていたようです。今日のインターネットによる情報革命と同様に、500年前の印刷物による革命も、多くの人びとを巻き込み、政治や経済を動かして、社会を大きく変えていくものだったのです。



印刷という革命

参考資料

- 1) Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences des arts et métiers, nouvelle impression en facsimilé de la première édition de 1751-1780, vol. 8, Stuttgart, F. Frommann Verlag, 1967, p.75. [3階F:ブックツリー内回り 035/0/20-8]
- 2) マーシャル・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系:活字人間の形成』森常治訳、みすず書房、1986。[7階:自動車庫 204/0/27-2]:Marshall McLuhan, La Galaxie Gutenberg : l'homme typographique, Paris, Gallimard, 1977。[2階E:ブックツリー外回り 085/0/3-372:373]
- 3) エリザベス・アイゼンシュタイン『印刷革命』別宮貞徳監訳、みすず書房、1987。[6階B:通常書架 749/23/4]
- 4) Andrew Pettegree, The Book in Renaissance, NewHaven, Yale University Press, 2010。[7階自動車庫 020/23/5]:アンドルー・ベティグリー『印刷という革命:ルネサンスの本と日常生活』桑木野幸司訳、白水社、2015年。[3階E:ブックツリー外回り 022/7/4]

①『こんな夜更けにバナナかよ』

②『社会をちょっと変えてみた』



① 渡辺一史著 文藝春秋 2013年

(5階 B:通常書架 369/27/410)

② 駒崎弘樹、秋山訓子著 岩波書店 2016年

(5階 A:通常書架 312/1/562)

人間科学部 社会福祉学科 准教授
山田 美保

「こんな夜更けにバナナかよ」は、映画化されたためご存知の方も多かもしれません。本書では、筋ジストロフィーという全身の筋肉が徐々に衰える病気のために、自分の力では身体を動かすことができず、24時間介護が必要な鹿野さんがボランティアの人と共に生きた日々が描かれています。鹿野さんの言動は時に身勝手にも感じられますが、彼の生きる姿には、「自分らしく(ありのままに)生きる」ヒントが隠されています。また、彼と助成ボランティア達の関係は、他者(社会)と関わることの本質を理解するのに役立つでしょう。

「社会をちょっと変えてみた」は、普段の生活の中で感じた疑問や生きづらさをなんとかしたい(しなきゃ)と思った政治家でも活動家でもない普通の人が、その考えを社会に発信し、行動した結果、法律や制度が変わった事例と草の根ロビイングの方法を紹介した本です。本書は、政治への関心にかかわらず、日常生活に潜む不公平や不都合に気づき、世の中の仕組み作りとそこでの住民の役割を考えるきっかけとなるでしょう。

2冊の本に込められたメッセージがあなたの心に届き、大学生活の中で花開くことを願っています。

『生き方』

人間として一番大切なこと』

稲盛和夫著 サンマーク出版 2004年

(1階 E, F: ブックツリー内回り)

(ベストセラーズ) 159/0/360)

図書情報課

川崎 陽奈



大学生活が始まり1ヶ月が過ぎ、新たな環境にも少しずつ慣れてきた頃でしょうか。新しい生活に一步を踏み出したあなたへ1冊の本をご紹介します。

本書は京セラやKDDIを創業した稲盛和夫氏が、タイトルの通り「生き方」について書いた本です。稲盛氏は本書の中で「人生の方程式」として次の式を提示しています。「人生・仕事の結果＝考え方×熟意×能力」。注目すべきは式が掛け算で成り立っていることです。稲盛氏によれば、どんなに能力のある人でも考え方が間違っていれば良い結果が得られず、逆にたとえ能力では頭脳明晰な人にはかなわなくても、強い熟意を持つ人や考え方が優れた人は、能力では優れた人よりも最終的には良い結果が得られるといえます。いかがでしょうか、考えさせられませんか。この他にも本書にはこれからの人生をどう歩んでいくか、それを考えるきっかけとなるヒントがちりばめられています。

大学という新たな場所に踏み出した今こそ、これからの大学生活或いはその先をどう過ごしていきたいか、自分は何を大切に生きていくのか、本書を読みながら一度じっくりと考えてみてはいかがでしょうか。

『The Missing Piece』

Shel Silverstein著

HarperCollins Publishers 1976年

(5階 F:ブックツリー内回り 726/5/55)

文学研究科 英文学専攻 博士前期課程 2年

前原 彩良



このシンプルで可愛い絵に見覚えがある方もいるのではないのでしょうか。私がこの本の邦訳版である『ほくを探しに』に出会ったのは小学生の頃です。大学生になって英語版 "The Missing Piece" に再会できたのは嬉しい驚きでした。

1ページにたった一言、二言、だからこそ誰しもが自分と主人公を重ね合わせ、気付きを得ることができるのかもしれません。

「完璧ではない」主人公は自分に「足りないかけら」を探すため、花のにおいを嗅いだり、カブトムシと散歩をしたりとその一瞬を楽しみながら、旅を続けます。見つけた「かけら」は大きすぎたり小さすぎたり、なかなかうまくいきません。そんなある日、自分にぴったりの「かけら」を見つけるのですが...

大学では高校よりも時間ができ、自分と向き合う機会が増えると思います。自分に「足りないかけら」を求めて、努力を重ねても、どうしても実現できず落ち込むこともあるかもしれません。そんな時にこの本を思い出してほしいです。その「かけら」を手に入れて完璧になることが本当に良いことなのでしょうか。「かけら」を追い求めたその過程こそが人生における楽しみであって、実は自分そのものであることが1番なのかもしれません。

『ザ・プレゼンテーション』

人を動かすストーリーテリングの技法』

ナンシー・デュアルテ著 (中西真雄美 訳)

ダイヤモンド社 2012年

(6階 B:通常書架 809/4/125)

法学部 国際関係法学科 4年

芹澤 優紀



「先生から生徒へ」一方的に学ぶ小中高のようなこれまでの受け身スタイルから一転し、自分から何かを発信する、自分からアプローチするという能力を鍛えることができるのが大学の大きな特徴だと思います。そして、その手段として最もよく用いられるのが「プレゼンテーション」です。しかし、いきなり「プレゼンテーションをしてください。」と言われて、不安になる人は少なくないのでは? 「そもそもプレゼンテーションって?」、「何から手をつければいいのかわからない!」という人が多いと思います。

そんな時に手にしてほしい1冊がこれです!

この本では、プレゼンの構成や技術を教えてくれるだけでなく、プレゼンを見る側である聴衆について知る方法、また、これまでの伝統的な方法はもちろんのこと、それと比較しながら非伝統的な方法による人並みを越えたプレゼンの仕方まで導いてくれます。また、ケーススタディでは、Apple社CEOのステイブ・ジョブズ氏、公民権活動家のマーティン・ルーサー・キング氏、第40代米大統領のロナルド・レーガン氏など、世界を揺るがした人たちが行った「聴衆の心を動かした・聴衆の心を掴んだプレゼンやスピーチ」を分解解説してくれます。

もし、周りから一目置かれるようなプレゼンを大学生のうちにできるようになったらどうでしょう? ワクワクしてきませんか?

世界の 図書館

〔イスラエル・イギリス編〕



タントウア・エキュメニカル研究所図書館 (ノートルダム大学)

Tantur Ecumenical Institute, University of Notre Dame
9111301 Jerusalem, Israel
<https://tantur.org/library/>

パレスチナ・イスラエル

神学部 神学科 教授 濱野 道雄

在外研究のためパレスチナ・イスラエルにあるタントウア・エキュメニカル研究所に一年間滞在しました。同研究所はアメリカのカトリック大学であるノートルダム大学に所属する研究施設です。「パレスチナ・イスラエル」と書いたのは、この研究所がグリーンライン（国際的に認められているイスラエルとパレスチナの境界線）と分離壁（2002年頃よりイスラエルにより、グリーンラインを越えて建設された壁）の間にあるからです。ここは「ユダヤ人もアラブ人も、そして全ての人が安全に安心して対話し、過ごせる場所」です。

実際この研究所では、「エキュメニカル（キリスト教各教派そして諸宗教の対話と協力を目指す運動）」研究所の名の通り、カトリック、プロテスタント、正教会は勿論、イスラム教、ユダヤ教といった全ての宗教間の対話が続けられています。そこでは歴史の研究と同時に、現在のイスラエルとパレスチナの紛争と平和がテーマになります。このテーマは、実際私が日本で知っていたより以上に一面的ではない、複雑で多面的な考察を必要とします。

ここには様々な背景を持った研究者、神父や牧師、そして学生たちが世界中から参加しています。多くの場合、3週間とか3か月とか期間を決め、また例えば「宗教間対話」とか「フェミニスト視点で考えるパレスチナ問題」等、一定の切り口を決めた研修・研究会が開催されています。問題が大きく多面的なので、一つ一つ切り口を定める必要があるのでしょう。具体的には講演会、研究会、フィールドワーク等ですが、私はそのどこに参加しても良いということで様々な刺激を得ました。この研究所の図書館の入り口にはこれらの研修・研究会の関連文献

がその時々集められ、ラックやテーブルに並べられており、大変便利です。参加者たちはそれを手にとり、複数の角度から考えることが出来ます。歴史や社会の問題を考えるには多面的な思考が必要であり、一つの意見や考え方だけでは不十分です。西南の図書館も勿論そうですが、図書館はその多面的な考え方を支援してくれます。インターネットで素早く情報を集められる時代だからこそ、メディアリテラシー、情報リテラシーを高めるために、複数の立場から多くの情報を得られる図書館は重要です。専門家の言葉といえ「鵜呑み」は危ういのです。

この図書館は中東全体においてもキリスト教関連蔵書では最大級のもので、1972年に設立され、一般にも開放されています。蔵書数は7万冊以上。エキュメニズムを中心に、ユダヤ教やイスラム教の研究が並びます。エキュメニズムを考える際に欠かせない古代教会に関する記録、研究所のコレクションはカトリックならではのものでしょう。

大きさは地下1階、地上2階で、個人用ブースもあり、私のようにこの研究所に滞在している人ならば365日、24時間利用できるのも魅力です。またヘブライ大学を含め、エルサレムにあるいくつかの図書館との連携もしています。

多くの情報から、再び一つの方向性や具体的な策を構想するためには、また専門家の講義を聴く事や、フィールドワークなどを通じた現場での人々との出会いが必要となってきます。この研究所では研究と出会いがよい循環を保っているように思えます。学生の皆さんも、授業、図書館を活用した自らの

研究、そして現場での出会いの、良い循環を西南学院大学で築いてくださればと思います。



〔写真1〕タントウア・エキュメニカル研究所図書館図書館入口



〔写真2〕研修テーマの図書と閲覧スペース



〔写真3〕地下階



〔写真1 LSE図書館の正面〕



LSE図書館 (ロンドン大学)

10 Portugal St, London
<http://www.lse.ac.uk/library>

イギリス

法学部 国際関係法学科 教授 山本 健

およそ10年ぶりに留学時代の母校の図書館を訪れた。このロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス(長いので以下、LSE)の図書館を紹介したい。LSEはロンドン大学グループの中の社会科学系の大学である。LSEの図書館は社会科学系としては世界最大の図書館であり、とりわけ政治学、経済学、社会学、国際関係論などの分野の文献が極めて充実している。社会科学分野の英語で書かれた文献はほとんど所蔵しているのではないだろうか。留学時代、私はこの図書館だけで全てが事足り、他の図書館で本を借る必要が全くなかった。

LSE自体は長い歴史のある大学だが、現在のLSEの図書館は2001年に新設されたものである。留学したときは、この図書館はまだピカピカだった。建築デザインも非常にモダンであり、最先端を行っている感じであった。さすがに10年以上経つとやや経年劣化が見られ、今ではピカピカ感は失われていた。それでも図書館は、文字通り世界中から集まった多種多様な学生たちで、席の確保も難しいほど賑わっていた。

本を読んだり勉強したりする場所としては、日本の図書館もイギリスの図書館も基本的に変わらない。しかしこの図書館を初めて利用したとき、いくつかの違いにも気づいた。まず授業でよく利用される本の数が多い。同じ本が、ものによっては20冊近くある。これは欧米の大学

ではどこもそうだが、学生は毎週、授業の準備として大量の本を読むことを要求されるからだ。それゆえ、読まなければならない本が1~2冊しかなければ取り合いになってしまう。同じ本が大量にあるという光景は日本の図書館ではあまり見られないので、最初は非常に新鮮であった。

また、これは憂められたことではないのだが、図書館の本に多くの書き込みがあるのも大きな違いだった。どの本にも至る所にペンやマーカーで線が引かれ、メモが書き込まれている。図書館の本はきれいに利用することが当たり前とされる日本人には衝撃だった。当時、友人に聞いてみたところ、線が引いてあった方がどこが重要な箇所かがわかってありがたいとの答えが返ってきた。さらに、私もどんどん書き込むよう勧められてしまった。だがやはり私にはできなかったし、西南の学生にも決して勧めない。が、文化の違いを垣間見た気がした。

10年後の現在、変化が見られた。ほとんどの新しい本や論文が、電子ファイルとして利用できるようになっていた。LSEの図書館ではどの学生もノートパソコンを持ち歩き、本や論文

をダウンロードしてパソコンで読んでいた。本をコピーすることもありしないようだ。本の必要な箇所はスマホで写真を撮っている。だがこれで、本に書き込みがなされることもなくなったのだろう。



〔写真2 印象的な図書館内部の螺旋階段〕

DATABASE

データベース 紹介

図書館では、様々なデータベースを整備しています。図書館のホームページから、アクセスでき、全て無料です。データベースは、膨大なデータの中から、ワンクリックで必要な情報を探し出したり、リンクを辿って瞬時に関連情報のサイトにアクセスしたりすることができます。また、データベースを使いこなせば、情報収集の時短もできます。今回は、新しいツールであるディスカバリーサービスについてご紹介します。ぜひご利用ください。

ディスカバリーことはじめ：ブレッグジットとメイ英首相と

図書館情報課 坂本 里栄

情報収集の新しいツールとして、ディスカバリーサービス(web scale discovery)を導入しました。ディスカバリーサービスとは、これまで個別に検索をしていた複数の学術情報源を、ひとつの窓口から検索できるシステムです。

情報収集を行うとき、一般的には、OPAC(図書館の蔵書検索)、データベース、CiNii Articles(雑誌索引)、新聞記事データベース、とりえずgoogle scholarといった、収録対象や検索方法の異なる情報源を使い分ける必要がありますが、ディスカバリーサービスを

使くと、これらの情報源を同一のインターフェイスから検索することができます。高度な検索スキルや、専門情報の収集方法に習熟していなくても、求める情報を簡単に入手できるように工夫されています。もちろん、世の中の全ての情報を網羅している訳ではありませんが、調査のきっかけとしての利用や、自らのテーマがどの程度の情報源を確保出来るかの調査を行うとき、このツールによって作業効率が各段に向上することが期待できます。

それでは、ツールの紹介を兼ねて、少し検索結果を見てみましょう。

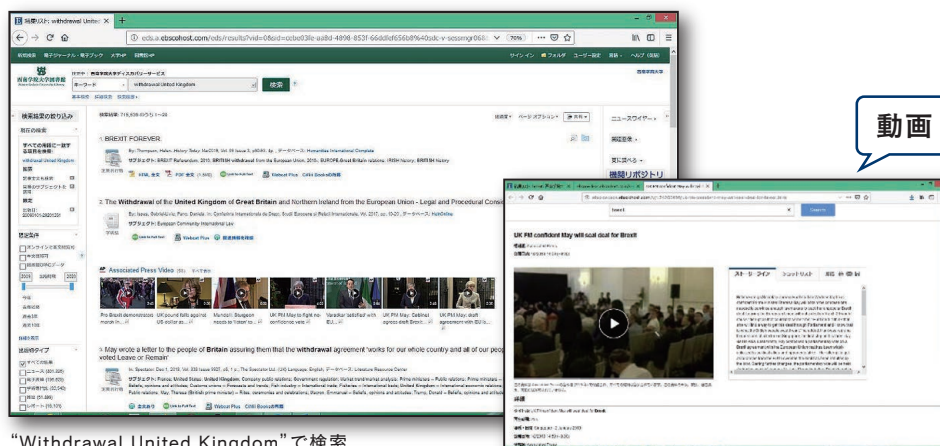
キーワード

学術論文

言葉の意味

ニュース

ディスカバリーでは様々な資料タイプが検索される



“Withdrawal United Kingdom”で検索

このツールは、日本語にも対応していて、例えば、この原稿を書いている3月中旬はイギリスのEU離脱がニュースになっています。そこで「イギリス EU 離脱」で検索してみると、最近10年の記事で630件以上(2019.3.18現在)が検索されます。結果にざっと目を通していくと、学術論文、図書、雑誌記事、ニュースソースと様々な出版物タイプの情報が集まってきました。結果一覧に目を通しただけで、

- ・イギリスのEU離脱は「ブレグジット (Brexit)」とも言うらしい。
- ・2016年に国民投票が行われたようだ。
- ・イギリスのEU離脱が仏独へ波及するかも!?と影響を心配している人もいる。(※1)
- ・北アイルランドとスコットランドの独立問題も絡んだ問題があるようだ。(※2)

といったことが読み取れます。

つづいて、興味のおもむくままキーワードの「投票」を加えてみると、日本語でEU離脱の国民投票における、投票行動を年齢や階級等から分析した論文(※3)が見つかりました。機関リポジトリ(※4)で公開されているようです。

検索語を、「Brexit」に変更してみると、結果は200万件を超えます。「withdrawal United Kingdom」でも、最近10年の記事で約70万件がヒットします。やはり、英語文献にも、目をとす必要がありそうということがわかります。検索結果を追っていくと、ニュース動画も検索されました。ハント英外務大臣が2019年1月2日に行ったシンガポールでの会見動画(※5)では、メイ英首相と議会の対立について言及されています。動画の原稿スクリプトが表示されるデータベースだったため、リスニングは苦手でも、活用できそうです。

続いて、登場人物にも注目してみましょう。合意なき離脱へと進むイギリスをなんとかコントロールしようとしているメイ英首相(Theresa May)。彼女はどのような人でしょうか。「Theresa May」で検索すると、Research Startersという辞書・事典の情報が最初に表示されます。英語ですが、ちょっと頑張って読んでみましょう。イギリスの歴史上、女性で首相になった2番目の人だということや、彼女のバックグラウンドが分かります。

イギリスのEU離脱を、次は、メイ英首相をキーワードに、視点を変えて情報収集してみましょう。キャメロン時代の2013年にEU離脱の可否を問う国民投票を行うことが決定し、2016年に国民投票は実施されました。この国民投票当時、メイ氏は、当時の保守党党首であり英国首相だったキャメロン氏と同じく、離脱反対派として残留に投票しました。ニュースで“leave or stay”が飛び交う映像は、まだ記憶に新しい方もいるのではないかと思います。この国民投票の

結果は、離脱派の勝利となり、キャメロン氏は辞任。保守党の党首選で離脱派の主要なライバルらが辞退したため、メイ氏は、保守党党首および首相に就任することとなりました。このように、集まった情報を紐解くと、残留派だったメイ首相が、国民の決断として、EU離脱を遂行する立場になってしまったという悲哀を知ることができます。では、混乱の原因を作ったといわれる当時ロンドン市長だったボリス・ジョンソン氏を調べると……。

図書館報が公開される頃には、この迷走劇の結末はどのようになっているのでしょうか。読者のみなさまは、この記事の後に起こったことを、ディスカバリーサービスを使って情報収集してみると、また違った景色がみえるかもしれません。

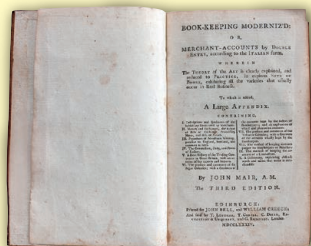
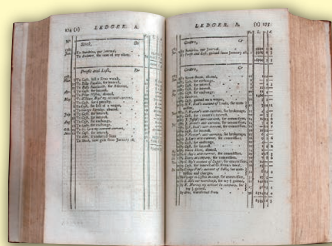
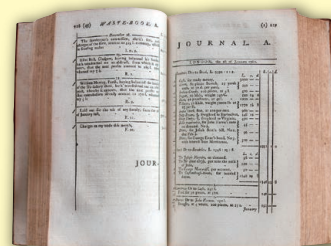
まだまだ未知数な部分があるサービスではありますが、学生教職員の皆さまには、学術情報に限っては、とりあえず「ググる」から、とりあえず「ディスカバリー」に変えてもらっても良い程度には便利なサービスだと感じています。どうぞ、ご利用ください。

参考文献

- (※1) 仏へ独へと波及するのイギリスの国民投票で「EU離脱派」勝利の衝撃。AERA. 2016, p. 58. (Accessed: 18 March 2019).
- (※2) THEME5 イギリス：イギリスのEU離脱で北アイルランドやスコットランドが独立!?. 日経WOMAN / Nikkei WOMAN. 2017, no.0410, p.116. (Accessed:2019-3-18).
- (※3) 大西広, et al. イギリス国民はEU離脱投票でどの程度迷いなく投票したか?: 年齢, 階級, 学歴属性から見た仮説的検証証; Igrisu Kokumin Wa EU Ridatsu Tohyo de Donoteido Mayoinaku Tohyoshitaka?: Nenrei, Kaikyuu, Gakureki Zokusei Kara Mita Kasetsuteki Kensho; An Analysis of UK's EU Referendum from the Perspectives of Age, Social Class and Educational Background.2017.EBSCOhost, search. ebscohost. com/ login.aspx?direct=true&db=edsbas&AN=edsbas.CD06 F85C&lang=ja&site=eds-live. (accessed:2019-3-18)
- (※4) 大学や研究機関が主体となって所属研究者の知的生産物を電子的に収集, 蓄積, 提供するシステム, またそのサービス. 学術機関リポジトリという.
"機関リポジトリ", 図書館情報学用語辞典 第4版, Japan Knowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2019-03-18)
- (※5) UK FM confident May will seal deal for Brexit. Associated Press, 2019. Associated Press Video Collection. EBSCOhost, search.ebscohost.com. (accessed:2019-3-18)

『Book-keeping Moderniz'd: or, Merchant-accounts by double entry, according to the Italian form...』

[6階 R: 貴重書庫 336/91/53]

【図1】
タイトルページ【図2】
総勘定元帳【図3】
仕訳帳

現在において、企業が会計を行う際の基礎は複式簿記であるが、その技法が芽生えたのは、古く、13世紀のイタリア北部の複数の商業都市においてであるとされる。会計の記録は証拠保全として重要だった。商品や金銭の受け払いをとまなう商人の活動それ自体は、形を残すものではなくすぐに消えてしまうものであるため、そのできごとを記録としてとどめることが必要である。だが、イタリアで生まれた複式簿記の技術が商業の世界に広がって行く速度はゆっくりとしたものであった。

複式簿記が急速に拡散したのは、ルカ・パチョーリの『スンマ』という数学書の出版によってであった。それは1494年の活版印刷によるものであり、グーテンベルクの「42行聖書」からわずかに40年たらずの後世のことである。これを契機に、ヨーロッパ各地における商業進展と同調しながら、複式簿記の技術は伝達されていくこととなる。

さて、ここで紹介するのは、本館が所蔵するジョン・メイヤー (John Mair) の *Book-keeping Moderniz'd: or, Merchant-accounts by double entry, according to the Italian form...* である。

著者のメイヤーは1702年(別の記録によると1703年)に生まれたスコットランド人であり、スコットランドで最も伝統あるセント・アンドリュース大学で学び、1726年には修士号まで取得している。1727年にはグラマー・スクールで教職に就くにあたって実施された3日間に及んだ採用試験科目に、ギリシャ語、ラテン語、数学、航海術学に加えて簿記会計学も含まれていた。メイヤーはこのグラマー・スクールでラテン語と数学の教鞭をとることとなったが、簿記会計学の授業を担当した事実は確認されていない。

18世紀のスコットランドは「啓蒙主義」の時代であり、メイヤーが勤めるグラマー・スクールはもっぱら学術志向であった。実用的な知識は「アカデミー」と呼ばれる新しい教育組織において教授され、商業

算術や実用科学そして簿記会計学などの実践的な教育はこの機関が担っていた。

メイヤーの簿記書はこれら新しい教育機関で主に使用されたと思われる。本書に先立って、メイヤーは、1736年に、*Book-keeping Methodiz'd: or, a methodical treatise of merchant-accompts, according to the Italian form...* という彼にとって最初の簿記書をエジンバラで公開している。同書は1765年までに7度版を重ねるほどに社会的に意義を持ったものである。

その後、メイヤーは最初の簿記書の内容を大幅に改訂したものの出版を試みた。だが実際に公開されたのは、彼が亡くなったあとの1773年のことだった。しかし、その新しいタイトルが示すように、複式簿記に関するメイヤーの考え方が文字どおりmodernizedされたものである。本書は、前著と同様に広く支持を受け、1807年まで版を重ねた。本館が所蔵するのは1784年に第3版として発行されたものである【図1】。

多くの簿記書は、記帳技術とその意義を説明する記述部分と、具体的な事例を用いた帳簿記入の例示からなっているが、本書はとくに膨大なページを例示に割いていることが特徴である【図2及び3】。

複式簿記技術を習得するために本書を手取る読者のニーズに応えるための工夫なのであろう。

なお、本書は、アメリカにおいても広範な需要を満たしたことを特に記しておこう。初代合衆国大統領となったジョージ・ワシントンは、農園主としてビジネスに携わっていたが、会計記録を実践するにあたってマニュアルとしたのがこのメイヤーの簿記書であったことがうかがえる。彼が手にしたと思われるメイヤーの簿記書は、現在、ジョージ・ワシントンの関連資料を集めたFred W. Smith National Library for the Study of George Washingtonに所蔵されている。

編集後記

新入生みなさん、そろそろ大学生活にも慣れ、生活のベースがつかめてきたのではないのでしょうか。そこで、オープンして3年目を迎えた図書館にも立ち寄ってみてください。大きなガラス窓が特長で、この時期は2階のラーニングサポートデスクのあるフロアから眺める、新緑の美しさは格別です。さて、今号では「新入生にイチ押し1冊」と題し、4人の方々に執筆いただきました。参考になさってください。まず本を手にとってみましょう。その先に新たな扉が開かれることを願っています。(S・Y)

西南学院大学図書館報 No.186

2019(平成31)年4月26日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。